

# ポケモン技など花拳繡 腿

ちゅーに菌

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ポケットモンスターの世界に転生し、前世の記憶から近接戦闘を極めるバトルガールが、ジムリーダーのイブキと戯れたり、ポケモンと鍛練しながらジョウト地方やアローラ地方でエンジョイ&エキサイティングするお話。

# 目次

バトルガールとエスパー／フェアリー	1
バトルガールとむし／かくとう	13
バトルガールとかくとう／ドラゴン	30
バトルガールとトレーナーズスクール	44
むし／かくとうの日常	56
みず／ドラゴンの種族値の暴力	71



# バトルガールとエスパール／フェアリー

「決闘よ！ ポケモンバトルよ！」

「はあ……？？」

俺は席についたまま、呆けた声を上げて目の前で声を荒げる水色の髪をした少女を見上げた。

ここは屋根の色は黒が多く、岩山に囲まれた場所にあるジョウト地方のフスベシティ。ドラゴンタイプ使いのトレーナーの出身地として知られ、「ドラゴン使いの里」とも呼ばれる土地だ。

そして、現在地は街にあるポケモンを学べるトレーナーズスクールであり、その教室内にいた。更に言えば中等部の始業式があった後であり、ホームルームが始まる直前である。

フスベシティにトレーナーズスクールなんか無いと思われるかも知れないが、そもそ

もゲームでは、ジムとフレンドリイショップとポケモンセンターを除くと、民家と呼べるものが、3軒しか建っていないため、ゲームと現実を一緒にするのはナンセンスだろう。このフスベシティは、シティと名がつくだけにはあり、都会ではないがそこそこ発展しているのだ。そのため、過疎化や少子化などが問題にならないレベルには発展している。

話を戻すと目の前におり、ピシッと俺を指差している水色髪の少女は、初対面のハズにも関わらず、大変見覚えのある容姿をしていた。

ズバリ、フスベシティのジムリーダー”イブキ”である。ただし、ゲームよりもかなり小さく、はずかしいかつこうもしていないので、まだジムリーダーではない。

………本当に突然だが、高校デビューとはなんだろうか？

高校デビューとは、中学生の頃は、それほどクラスで目立たない存在だった人が、高校に入ったと同時にイメージチェンジをして、垢抜けた格好や振る舞いをしたり、不良行為に手を染めたりすることなどを意味する用語である。

別に俺はそれに当てはまるといっていいわけではない。今の年齢は12歳で中学生だ。それに高校デビューではなく、むしろ前にいた地方で少々色々と弾け過ぎていたため、そういう世間のしがらみから離れ、まっさらで普通の中学生として学生生活を送りたいのだ。

だというのにこの水色頭は何故か、ピカピカの入学早々やらかしてくれたのである。既にクラス中の視線は、俺とコイツに釘付けた。

「……わけを聞いても？」

「ワタルさんがあなたをスッゴク強いトレーナーだと言ってたのよ！」

その言葉に騒然となり始める会場。それもそのはず、ゲームではチャンピオンや四天王だったドラゴン使いのワタルは、今はまだフスベシティのジムリーダーをしている。そのため、この街の子供達にとつては四天王やチャンピオンよりもわかりやすい憧れの的である。そんな奴に強いトレーナーだなんて言われた日にはッ……！！

早くも普通の学生生活を送る計画が傾き始めたことに絶妙な苦笑いを浮かべるしかない俺であった。



ゲーム視点を知っている俺は、当然というべきか転生者という奴である。ここはポケットモンスターの世界であり、俺は転生……いや、身体的には憑依に当たるのか……？ 兎に角、それを体験しているため、今こうしてここにいるのだ。

ちなみに俺は前世とは違い、性別は女になった。それに加えて容姿は、藍色の髪をポニーテールに結び、灰色の目をした細身の女——”バトルガール”だったりする。この身体に割りきれてはいないが、第2の人生と言うこともあり、前向きに納得している……日に日に膨らむ胸とか非常に複雑な気分だが、納得はしている……ハズだ。

それよりも問題はバトルガールな方である。バトルガールと言えば、からておうの対になる存在であり、かくとうポケモン使いである。その為なのか、妙にポケモンと身体を鍛えることに引かれるのだ。

そして、当時の何を思ったか、前世では事故で死んでしまったため、今世ではせめて



そんなことがないようにひたすらポケモンと身体を鍛えることに幼少期の全てを費やしたのである。目標は10万ボルトで黒くなるだけですんだり、爆発しても吹き飛ばされるだけで済むようなスーパーマサラ人だった。

まあ、それ以前に味方ポケモンにも当たる全体技で、特にじしんとかはトレーナーにも当たりそうなものなので鍛えておいて損はないだろう。

前にいた地方——まあ、ぶっちゃけ”アローラ地方”なんだが、アローラではマ<sub>マ</sub>ロケツト<sub>ファイア</sub>団だの、世界を征服するだの、新しい進化の可能性だのと傍迷惑な組織が今はいなかったため、何も考えず平和に鍛えられたことも拍車を掛けたのだろう。

本当にひたすらポケモンと共に修行の日々に明け暮れた。まあ、途中で少々特殊なポケモンが2〜3体ほど手持ちに加わったりもしたが、アイツらは突然家に来たり、修行したら勝手に落ちてきたので俺のせいじゃない。

そして、11歳になったときに鍛え抜いたポケモン達と旅をした。それはもう手当たり次第にバトルを吹っ掛けながら楽しく島巡りをした。

その結果——。

カヒリと同じように島巡りチャンピオンになってしまった。それも最速かつ無双も

いいところだ。そして、気がつけばアローラ地方中に俺の名を知らぬものがないほど有名になってしまっていたのである。日課のモーモーミルクを飲むためにポケモンセンターに行こうとすれば、道中で観光客含む十数人に話し掛けられ、ポケモンセンターの椅子に座ってモーモーミルクを飲むだけで人だかりができ、挙げ句の果てにモーモーミルクが売り切れるような事態になることもあった。

純粹にポケモンと身体を鍛えたかった俺としては、突然、パンダが何かになったような気分だ。なので、流石に反省し、ほとぼりが冷めるまで父親の田舎であるこのフスベシティに引っ込み、普通の学生生活を送ろうとしていたのだ。

ちなみに母親はシンオウ地方のカンナギタウンの出身である。アローラ地方で育ったのは母親の趣味と父親の仕事の関係だ。経歴だけ無駄に複雑なバトルガールである。

「はあ……」

トレーナーズスクールからの帰宅中。俺は大きな溜め息を吐いた。初日から中学デビューに失敗したかもしれない……。

とりあえず、はずかしいかつこうの少女にはせめて明日にして欲しいと頼み込んでおいた。ちなみに俺もイブキも学校指定のブレザーを着ていたので、格好は変ではない。スカート滅多に着ないからスースーする。

「寝る……」

自宅のドアの前に立ったと同時にそう呟く。何もかも嫌になったので日課の鍛練を放り捨てて寝ることに決めた。

そして、鍵を開けてドアを開け――。

『マスター！ お帰りなさい愛してますラブですハグしましょう！ あつ、お休みになるんですか!? 寝るなら合体しま――ぶへっ!?』

いつものようにドアを開けた瞬間、頭の中に奇つ怪な内容の”テレパシー”が響くと同時に、白と緑を基調とした配色をして、胸に赤い角のようなものが生えた女性的な外見をしたハウエン地方のポケモン――”サーナイト”が正面から突撃してきたのでアイアンクローで顔を掴んで止めた。

生意気にもこのサーナイトは170cmも身長があるため、俺とはまだ20cmほど身長差があるが、最近俺の背が伸びたのでようやくこうして掴めるようになったのである。

『タツプタツプタツプ』

タツプアウトは口で言えないときに、相手の身体を叩いて示すギブアップなので俺は何も聞いていない。

彼女はサーナイトのサナエさん。俺のアローラ地方での最古参の手持ちポケモンの一匹であり、ホウエン地方やカロス地方から持つてきたわけではなく、何故かアローラ地方にいた元野生ポケモンである。ロトム図鑑などまだ無く、島スキャンが出来ないため、何故アローラ地方に当時キルリアだったサナエさんがいたのかは永遠の謎。

『テレポート!』

すると手の感触が消え、代わりに背中から抱き締められる。花と太陽のような香りに女性特有の匂いが不思議な感覚を覚えた。俺の背後にテレポートしたサナエさんに抱き着かれたのだろう。サナエさんは柔らかいが、背中に当たる赤い出っ張りがゴリゴリする。

『ウエヒヒヒヒ——! 中学生に成り立てのマスターの肢体たまんねえな——ぎやー!?!』

俺はその体勢でサナエさんを投げた。廊下に背中を打ち付けたサナエさんから悲鳴が上がるが知ったことではない。ああ……本当にどうしてこんなサーナイトを手持ちポケモンにしてしまったのだろうか……。

『どっこいしよつと……私が強かったからでしょう。素で6Vのサーナイトなんて、この世界じゃ中々お目に掛かれませんかからね。すごい特訓もこの世界じゃ今のところありませんし、あつてもLv100のポケモンなんてこの世にいるかどうか』

特にダメージを受けた様子もなく起き上がり、そう言うサナエさん。何か違和感を覚えると思うが、このサーナイトのサナエさんは特性がテレパシーのため、普通に人間とも話せるだけに限らず、他者の心が読めるのである。そして、相手がその瞬間に考えていることや、挙げ句の果てに記憶まで読み取れる……そう、記憶を読み取れてしまうのだ。

『前世が男の人とか、この世界が元は国民的ゲームだとか、クツソ面白い記憶のある人間の手持ちポケモンにならない手はないと思いました。まあ、今はそれ抜き——いや、込みで好きですよマスター』

きもちポケモン（ラルトス）↓かんじようポケモン（キルリア）↓ほうようポケモン（サーナイト）

と、進化していく過程で頭のネジをどこかに置き忘れてきてしまったのだろう。そのくせ、この通り他人の心や記憶を自由に読めるのだから質が悪い。

『ああ、それより今晚はカレーとシチューとハヤシライスどれがいいですか？ 今、ルー入れようとしてたところなんですけど？』

「……………シチュー」

『はい、わかりました』

そう言いながらサーナイトの鳴き声を上げてキッチンへと戻るサナエさん。こう見

えてポケモンバトルは無茶苦茶強い上、家事万能だったりする。というか、胃袋と生活導線を握られているため、アローラ地方で集めた俺の手持ちポケモンで双璧をなす問題児の片割れである。

しかし……悔しいが、サナエさんの料理無茶苦茶美味しいんだちくしょう。楽しみだなあ……シチュー。

もう片方の問題児は、リビングで寝転がりながらポテチでも食べていると思うので、今語ることではない。

とりあえず、俺はブレザーから部屋着のジャージに着替えるために自室へと向かった。



## 『アローラ〜♪』

翌日、中学デビューについては一旦考えるのを止め、大変トレナーズスクールに着いて来たそうにしていたサナエさんを連れて来たのだが、クラス内は大変なことになっていた。クラス外までサナエさんを見に来ている生徒が集まっている始末だ。

全国凶鑑のごった煮もいところのカロス<sup>近</sup>地方やアローラ<sup>年</sup>地方のせいで感覚が麻痺していたが、そう言えばハウエン地方やジョウト地方では他の地方のポケモンは、レアどころか都市伝説レベルだったことをここで初めて思い知ったのである。

そして、サナエさんは生徒とテレパシーで会話しつつ、挨拶でアローラの小っ恥ずかしい挨拶をしていた。キッチンと手で丸く円を描くことも忘れていない。

そう言えば、サナエさんは生粋のアローラ人だったと思いつつながら俺は遠い目で窓の外を見ていた。

アローラ地方から手持ちポケモン……全部持つてきちゃったよ……だつてほら……大切な仲間だし……あはは。

そらきれい。



# バトルガールとむし／かくとう

”イブキ、この街に戻ってくる『ドラキア』という同じ年の娘と仲良くしてやってくる”

ある日。イブキは兄弟子であり、フスベシティのジムリーダーであるワタルからそんなことを言われた。イブキは当然、大量の疑問符が浮かんだため納得するまで質問をした。

それによればドラキアという同じ年の少女は、父方の祖父が、このフスベシティの出身であり、イブキやワタルのずっと先輩に当たるドラゴン使いらしい。その上、フスベシティの出身ではないが、母方の祖母もドラゴン使いらしく、祖母が住む地方では名の知れたドラゴン使いとのこと。

また、イブキにとって衝撃的だったのは、本人がフスベシティに来る前に住んでいたアローラという地方で、チャンピオン相当の実力を持ち、”かくとう”と”ドラゴン”タイプポケモン使いだったということだ。

つまりは異国で最強クラスのドラゴン使い。それも自身と近い年にも関わらず、兄弟子として慕っているワタルよりも強いかも知れないというほどの少女なのである。

また、何故かワタルは少女の来訪を非常に嬉しそうにしており、それがまたイブキの感情を逆撫でした。

12歳であり、精神的に未だ幼くもあるイブキは、認めないと心に強く想い、まだ見ぬドラキアという少女に対して対抗心を抱くのだった。

(他の地方のドラゴンポケモンのタマゴとか融通して貰えないものかな……)

ワタルが考えていたことがイブキに伝わらないのは幸いだっただろう。



フスベシテイのトレーナーズスクールの校庭。

そのバトル場で、遠い目をしたバトルガールの少女——ドラキアと、ドラゴンの里の長老の孫——イブキが対峙していた。それを囲むように並んで、1学年分の生徒がポケモンバトルが始まるのを今か今と待っていた。

「先生……なんで学生同士のただのポケモンバトルを生徒の授業を潰してまで振じ込むのや……」

『草』

虚ろな様子で呟くドラキアに対して、文字通り頭の中に草を生やすサーナイト。どうやら1匹目はこのサーナイトが戦うようだ。

ドラキアの呟きに対して、トレーナーズスクールとしてはむしろ喜んで授業を急遽変更するだけの価値があると判断したのである。何せ、ドラゴンポケモンの里の長老の孫であり、トレーナーズスクールでもトップクラスの實力を持つイブキと、稀な家族構

成と生え抜きの実力を持つドラキアのポケモンバトルだ。

「形式は？」

『使用ポケモンは3匹。勝敗に関わらず、毎回ポケモンを互いに入れ換えての1VS1シングルバトルらしいです』

「3体手持ちを見せろってか」

ちなみにイブキはポケモンを3体持っており、ドラキアはサーナイトを含めて6体ポケモンを所持している。その中から3体選出することになるだろう。

生徒たちと違い、書類でドラキアのことを知った教師陣としては、教えることがあるのかと言いたくなるような存在のポケモンバトルを生徒に見せ、教師も学びたいということが授業以上の意味を持つのである。故にイブキとドラキアのポケモンバトルを授業で行うことになったのだ。

「行きなさい」ミニリユウ！

「リユウー！」

イブキが繰り出したのは、フスベシテイのドラゴン使いらしいポケモンのミニリユウであった。ほっそりとして、マスコットののような質感をしている可愛らしいドラゴンポケモンである。

『ミニリユウってサンドとかイシツブテと同じ合計種族値ですよ。300でしたっけ』

『?』

「せめてタツベイやジャラコと並べてやれよ。進化すれば600族だぞ」

緊張感のまるでない様子のドラキアとサーナイト。少なくとも生徒と教員に囲まれて試合を見られること自体に緊張はしておらず、特に何も思うところはないようだ。

そして、審判を勤める教員によりポケモンバトルは始まる――。

「ポケモンバトル……はじ――」

『“かげうち”!』

「!?!」

それは波乱の幕開けだった。



「ポケモンバトル……はじ——」

『“かげうち”!』

「!?!」

ギリギリ審判に怒られないレベルで、開始した瞬間にサナエさんから影が伸び、ミニリュウの背後からサナエさんの影が襲った。

ミニリュウはかげうちによってバイクに撥ね飛ばされたような衝撃を受け、サナエさんの方へと飛ばされる。この時点でミニリュウは白目を向いており、瀕死の2歩手前である。

『おら! 顔がお留守ですよ!』

体勢を立て直すことが出来ないミニリュウに対して、サナエさんは片手に冷気を纏わ

せ、拳を引き絞りながら綺麗な攻撃フォームを取った。

『れいとうパンチ!』

ミニリュウの顔にサナエさんのれいとうパンチが突き刺さった。絵面は漫画のようだが、かげうちの時点で意識が飛び掛けていたミニリュウは地面をかなりの勢いで数回バウンドし、イブキの足元に転がった。

啞然とするイブキの前にサナエさんがテレパシーを発する。

『ウエイウエイウエイ! そんなもので私とマスターに挑むとは鍛練が足りませんねえ! あああん!』

そんなことを言いながら、やたら良い音の鳴るシャドーボクシングをし始めるサナエさん。足の運びにも異様に切れがあり、エビワラーか何かとしか思えない。

特殊技使えよサナエさん……トレーナーズスクールの者全員にサーナイトは物理アタッカーだと思われるだろ。ついでに言えば、俺は全く指示を出していない。

このように俺の手持ちポケモンは、鍛練をし過ぎたせいか、基本的に近接戦闘を好んでいる上、反復練習をし過ぎたためか、指示が無くとも勝手に動く。そのため、アローラでは戦った相手にやたら印象に残ったのかもしれない。サナエさんこんな奴だし。

ちなみにサナエさんが近接戦闘をしている理由は、殴ったり蹴ったりする感覚を直に感じられるからだそうだ。銃よりナイフを選ぶ殺人鬼と同じ理由である。

当然というべきか、ミニリュウの戦闘不能を確認しつつも審判の先生は公正なジャッジを下した。

「しよ、勝者！ イブキ！」

「えっ……!?!」

『ウツソオオ!?!』

「当たり前だバカ。これは模擬戦でも形式上は公式戦だぞ。フライングに決まってる」

初戦は俺の反則負けになった。理由が当然過ぎて涙が出る。トレーナー戦なんて基本的にルールはあつてないようなものなので、サナエさんはいつもあんな感じなのである。

イブキは何か言いたかったようだが、何故か勝ったことや、次の対戦が控えているためか、振り上げた拳の下げどころを失ったかのような絶妙な表情をしていた。





「い、行きなさい」シードラ！」

気を取り直して互いに2体目のポケモンを出す。イブキの方はタツツーから可愛さを抜き取ったような外見が特徴のシードラである。何故かシードラの時だけ”どくのトゲ”を特徴で持つっており、タツツーとキングドラは”すいすい”を持っているという少し不思議なポケモンでもある。反抗期なのだろうか。まあ、凶鑑によれば珊瑚礁でダイバーが刺される事故が後を断たないらしいので、オニダルマオコゼ並みに危ないポケモンでもある。

このシードラがいつか、こおりタイプ技でドラゴンを全館出来ると思ってた挑戦者の頭にハテナを浮かべさせ、はかいこうせんで挑戦者を沈めてくるキングドラになるのか

と思うと感慨深い気分になる。

『こっちは誰を出すんですか?』

「申し訳程度のバトルガール要素」

『かくとうタイプですね』

ちなみにサナエさんはバトルフィールドから離れ、今は俺の隣に立っている。サナエさんはサトシのピカチュウ並みにボールに入らない上、入れてもすぐに脱走する。サナエさんがボールに入っているのは瀕死のときぐらいのものである。

俺は腰に付けたポーチからボールを取り出す。それはプレミアボールである。この中に入っているポケモンが、プレミアボールの外観をととも気に入り、是が非でもプレミアボールにしか入ろうとしなかった。まさか、ポケモン側からオシャボを要求されるとは夢にも思わなかったな。

その上、入りたいと思っているクセに捕獲確率が異様に低かったため、とんでもない数のモンスターボールを10個ごとに買うハメになった。そして、増え過ぎたモンスターボールをアローラ中のちびっこに配り歩いたことを思い出す。

『そういうこともしてたからアローラで知名度上がったんでしょうねえ。小さい子からボールのお姉ちゃんって呼ばれて、大人気でしたし』

「こいちゃん」

心を読むサナエさんを無視して、俺はボールを投げ、ポケモンが飛び出した。

「かぶりん」

それは華奢な人間の女性と、脱皮直後で白く透き通った誰しも自宅で1度は見掛けたであろう虫をかけ合わせたような、半人半虫の容姿を持つポケモン——”UB02  
BEAUTY ビューティ ビューティ ことフェローチエ”だった。

サナエさんやじいちゃんとはあちゃんから貰ったポケモンと修行している最中に、突然空から降ってきたウルトラビーストである。

「な、なにそのポケモン……」

腰に片手を当ててシードラを見下ろしているフェローチエに対してそう呟くイブキ。ウルトラビーストは威圧感がスゴいからな。伝説のポケモンと言われても納得するだろう。

まあ、ウルトラデザートに棲息しているポピュラーのポケモンのようなのでウルトラビースト達が伝説のポケモンと呼べるかどうかは微妙だろう。どちらかというと、前世

の外來種の害獣といったポジションが妥当かもしれない。

何せフェローチエはゲーム的には特にそういった特性は持っていないが、フェローチエは見た相手を魅力する能力を持つ。謎パワーなのか、フェロモンか何か出ているのかはわからないが、オンオフの切り替えは出来るらしく、今は魅了はしていない。

「優しくしてやれよ。」

フェローチエの背中に向けてそう言うと、フェローチエはこちらを見ずに腰に当てていない方の手を一度だけ上げて返事をした。その姿はスーパーモデルのような美しさによってとても様になっている。

フェローチエがそう言ったのには理由がある。というのもこの世界では、数値上のレベルの概念はないが、確かにレベルのような実力の上昇と明らかな個体差が見られるのだ。そして、鍛えているうちになんとなく、見ただけでポケモンのそういったレベルを漠然とだが、把握出来るようになったのである。

そして、よくワタルのカイリユーが改造などと言われ、俺も前世ではそう思っていたが、現実でポケモン育成してみると意見は変わった。

あの進化レベルの値は、主人公ならそのポケモンを進化させられる値なのではないかというのが今の俺の意見だ。すなわち、ワタルには40や47レベルのハクリユーをカイリユーに進化させられるだけの能力があるということだ。なのでそれもまたポケモ

ンに対する才能だと俺は考えている。

そのため、このドラゴンの里ではドラゴン使いを制限しているのだろう。才能によって進化レベルが上下するのなら、元々進化レベルの高いポケモンは、トレーナーの才能がなければいつまでも進化させられないなんてこともあり得る。それはポケモン側が可哀想だというものだ。まあ、ポケモン側が進化を望んでない場合はその限りじゃないがな。俺も1体そういう奴手持ちにいるし。

少し話が逸れたので戻すと、俺の見立てではシードラは30台後半から40台には行かない程度のレベルだと考える。それに引き替え、初期レベルですら60のフェローチエの今のレベルは鍛練によって80台は超えていると思われる。

つまり前提条件で既にシードラに勝ち目は非常に薄い。

また、フェローチエの最大の特徴は種族値であり——HP71・攻撃137・防御37・特攻137・特防37・素早さ151・合計570とビビるぐらい特化型の両刀アタッカーである。素早さ、攻撃、特攻に関しては文句なしに禁止伝説級のステータスで、倒す度に一番高い能力が上がるビーストブーストの特性も合わさり、ゲームでは殺られる前に殺れ！を体現したようなポケモンであった。

ちなみにどれぐらいフェローチエが脆いかと言われれば、レベルが同等で考えると、4倍とは言え、ほとんどの場合でモクローの”つつく”に確一で取られる程度には脆

い。

しかし、これはゲームだった場合の話。これが現実となるとフェローチエは超高速で移動するパワーアタッカーというとんでもない性能なのだ。

そんなことを考えているといつの間にか、ポケモンバトルが始まっていた。

「——!?!」

「は………? え?!」

その直後、フェローチエは走り出し、シードラの周囲を駆け回る。一瞬で時速190 kmにまで加速できるポケモンの速度は既に常人の動体視力で捉えられない領域にまで達している。

こんな奴に攻撃を当てろと言う方が酷だろう。

『よけるピカチュウが成立しますからね』

「素早さは偉大だよな」

別に俺の動体視力ならフェローチエを目で追えるのだが、平均速度が速過ぎて、指示を出す・指示を聞く・指示を実行するという普通のポケモンに必要なプロセスを踏むよりも、余計な思考を挟みせずに自分で行動させた方が遥かに強いのである。そのため、もっぱらフェローチエの修行は脚力とキック力と状況判断の鍛練と、レベルに一切関係のない修行を中心に行っている。

つまり俺がフェローチエに出せる指示は――。

・ガンガンいこうぜ

・いのちをだいに

・いろいろやろうぜ

・せんりよくをうばえ

・わたしにまかせて

・よけろフェローチエ

こんな感じの漠然としたものになる。任天堂でもゲームが違う。

『私はテリワンが一番好きです』

「俺はDQ5だな」

『えー……嫁はデボラ派なんですか？』

「記憶を読むな」

ちなみにだが、この世界には任天堂製のゲーム機が当然のようにあるため、他のゲームも大量に存在する。そして、サナエさんは結構ディープなゲーマーである。

「――!?!」

「シードラ!?!」

そんな話をしているとフェローチエの”トリプルキック”がシードラに炸裂し、シー

ドラは場外まで吹き飛ばされ、目がバツテンになった。

ちなみに技に関しても4つ以上覚えれるため、こうしてゲームならあまり残さないような技も使える。

「かぶりん」

「お帰り、よくやったな」

「……………」

「ん…………？」

バトルが終わって戻ってきたフェローチエが、何故かこちらに手を差し出してきた。握手でもしたのかと首を傾げていると、よく見れば手がプルプルと震えていることに気づく。

……………。

……………。

……………。

……………。

……………。

……………はっ！



「お前毒ったのか！」

「かぶ……」

さつさと毒消しを出せと言わんばかりに半眼で見つめてくるフェローチエ。どうやらシードラの特徴のどくのトゲが命中したらしい。

こういう微妙に締まらないことが起こるところはゲームのまんまだなと思いつつ、毒消しとおいしいみずをフェローチエに渡すのだった。



モン——ジャランゴもキルリアのように全身にアザが見られた。

「ジャラ!？」

ジャランゴは額に汗を浮かべながら防御を固めるポクサーのように腕を構えている。そのまま動かずに辺りを見回していると、ジャランゴは背中に激しい衝撃を受けてポールのように吹き飛ばされる。

地面を転がったジャランゴが体勢を立て直しながら衝撃を受けた方向を見ると、スポーツウェアを着てスニーカーを履いた少女——ドラキアがポニーテールを揺らしながらとてもよい笑顔をしていた。

足を振り抜いた体勢で止まっており、ジャランゴを攻撃した者が誰かということは一目瞭然であろう。

そして、本当に楽しそうに人当たりのいい笑みを浮かべながらドラキアは呟いた。

「キルリア! ジャランゴ! 身体を動かすって本当に楽しいな!」

次の瞬間、ドラキアの姿がぶれてジャランゴの目の前に出現する。そして、引き絞られていた拳を放ち、ジャランゴの腕に当たる。

到底、人体から出ているとは思えない鈍い轟音とが響き渡り、衝撃だけで激しく砂塵

が舞う。殴られたジャランゴはガードしていたにも関わらず、数m後退しており、その異様な威力がわかることだろう。

「あつはははははは！ まだまだ行くぞ！」

「ジャ、ジャラ……!?!」

終始笑顔で高笑いをしながらジャランゴへと殴り掛かるドラキア。その様子は場面だけ切り出せば子供特有の無邪気さに見えなくも無かったが、ジャランゴがドラキアを見る化け物を見るような瞳が全てを物語っていると見える。

『……………なにあれ人間じゃないです』

いつの間にか気絶から目覚めていたキルリアは、テレパシーでポツリと呟き、顔を引きつらせていた。

これはドラキアが一桁の年齢——まだアローラで弾けていた頃のお話である。



イブキは打ち拉がれていた。

対峙しているドラキアとポケモンバトルをしているにも関わらず、全く歯が立たないどころかバトルにさえなっていないのだ。それほどまでに実力に差があった。

何せ、ドラキアは今のところ1度も自身のポケモンに対して指示を出していない。にも拘らず、勝利をもぎ取ることが出来るトレーナーなど彼女は一人たりとも知らなかった。

また、初戦も向こうの反則負けであったが、後1秒サーナイトが遅く行動していてもきつと同じように負けていたことにイブキは気づいていた。

挑んだことに後悔し始めていた。しかし、まだドラゴンポケモンの1体すら出させて

いないことに気付き彼女は声を張り上げる。

「ここからよ！ これまででは手加減してたんだからね！」

『知ってますよマスター。アレがツンデツンデですね』

「ツンデレな。後、デレてない」

「かぶりん」

何故かボールに戻らず、フェローチエはサーナイトとは反対の位置に居て、ドラキアは両サイドから挟まれている。ドラキアはイブキを敵とも思っていない様子であり、涼しい顔をしていた。

「行きなさい」ハクリュー！」

「リ्यूー！」

イブキはボールを投げ、ハクリューを呼び出す。細くしなやかな身体は幻想的ですから、ドラゴンポケモンらしい佇まいと言える。

確かにこれまでのイブキの手持ちポケモンとは一線を画した様子に、少しだけドラキアは面白そうに口を綻ばせていた。

「うーん……どれにするか」

ドラキアはボールを3つ取り出して見つめる。少し考え込んだ末、ドラキアは顔を上げるとイブキに声を掛けた。

「これ、全部ドラゴンタイプなんだけど……どれがいい？」

まるで何れでも勝てるかのような口振りだ。それがイブキの神経を逆撫でしたが、それだけの実力を持っていることを思い出して頭を冷やすと、イブキは躊躇なく吐き捨てた。

「ああ、中身はコモルーとドラミドロと——」

「一番強い奴よ！」

「お、おう……」

『哀れだよ 炎に向かう 蛾のようだ』

「ドラゴンタイプとドラゴンタイプなんだよなあ……」

「かぶりん」

2つのボールを戻し、残ったゴージャスボールをドラキアを投げた。

「行け。”ジャラランガ”」

ボールから現れたのは、体中が鱗で覆われ、まるで黄金の飾りでも着飾っているような出で立ちをした二足歩行のドラゴンポケモンだった。

「か、かつ……いい……」

イブキは思わずそう呟く。

特筆すべきはその佇まいであり、まるで長年を山中で過ごした修行僧のように厳かで

ありながら、武人のように鋭い闘気を宿していた。ジャラランガから放たれる威圧感  
は、その双眼で見つめられるだけで、並みのポケモンならば逃げ出してしまおうと感じさ  
せるほどだ。

実際、明らかにこれまで見てきたどのドラゴンポケモンとも毛色の違う雰囲気、イ  
ブキとハクリューは額から汗を流している。

「ジャラ……」

一言ジャラランガは眩き、人間のように頭を深く下げる。思わずイブキとハクリュー  
もそれに釣られた。

そして、審判からの声掛けが入り、ポケモンバトルが始まった。

「ハクリュー……」りゅうのいぶき”よー」

先攻を取ったのはイブキだった。ハクリューは”りゅうのいぶき”を吐き出し、ジャ  
ラランガへと攻撃をした。当然、同じドラゴンタイプならば弱点であろう。

”かえんほうしや”で迎撃」

ジャラランガは”りゅうのいぶき”に合わせて”かえんほうしや”を吐き出す。一  
瞬だけ”りゅうのいぶき”と”かえんほうしや”がぶつかり合ったが、すぐにジャララ  
ンガの”かえんほうしや”が打ち勝つ。

「ッ!? 避けて!」



ハクリューは間一髪で避け、元いた場所を激しく炎が襲い、バトルフィールドの3分の1ほどを火の海に変える。これだけでも異様なほどに鍛えられたドラゴンポケモンであることは明白であろう。

「どうした？ 手加減してやろうか？」

「……………」

ドラキアの煽るような不敵な笑いと共に、ジャラランガは早く来いとばかりに片方の掌を上に向け——”ちようはつ”を行った。

「いらぬわよ…………ツ！」

「リュツ!!」

イブキとハクリューは同時に”ちようはつ”を受け、頭に血が昇る。逆に彼女としては、いつもの調子を取り戻したかもしれない。

「ハクリュー！ ”たたきつける”！」

ハクリューはイブキの指示でジャラランガに突撃し、バネのように尻尾を弾き飛ばしてジャラランガに叩き付けた。対するジャラランガはそれを避けることなく片腕で受ける。

「ジャラ…………」

「リュ!？」

ダメージを受けながらジャラランガはほくそ笑む。そして、叩き付けられたハクリューの尻尾を逆に掴み取ると、逆の腕を引き絞りながらハクリューを引き寄せた。

「アツパーカット」

「――！」

「――!?!」

「ハクリュー!?!」

ハクリューの下顎目に掛けて放たれたポケモンの技ですらないそれは神速の一撃だった。

ジャラランガから放たれたアツパーカットは、衝撃の余波だけで周囲を扇状に抉って地形を変える。それが直撃したハクリューのダメージは想像を絶するものだろう。

アツパーカットを受けたハクリューは数歩分後退し、そのまま崩れ落ちた。完全に気絶しており、戦闘不能だということは明らかである。

「ハクリュー戦闘不能！ 勝者ドラキア！」

教員の審判から判定が下り、イブキは啞然とした様子で膝をつく。

そんな様子のイブキの元にドラキアは、サーナイト・フェローチェ・ジャラランガを引き連れながらやって来た。それはとても様になっており、王者の風格を思わせる。

「何よ………笑いに来たの?」

自分から挑んでおいてまるで完封負け。これほど惨めなことはない、イブキは自身を責めていた。

しかし、ドラキアは首を振るとイブキに手を差し出してにつこりと笑い掛ける。その笑顔は母親のように優しくであり、ずっと笑っていらればいいのにとイブキが考えるほど良い表情をしていた。

「ポケモンバトルありがとう」

「あう……」

あまりに真つ直ぐに言われた言葉にイブキは赤面する。ドラキアの様子にトレナーとしてののけじめを思い出し、イブキはドラキアの手を取って立ち上がった。

「つ、次は絶対に負けないからね!」

「何度でも来い。ポケモンバトルは大好きだ」

こうして、フスベシテイのトレナーズスクールの課外授業は蓋を開けてみれば円満に幕を閉じたのだった。

『ツンデツンデ——いったい!?　なんで蹴るんですかフェローチェさん!』

「かぶりん」

「ジャラ……」

円満に終わったと思われる。



「ドラキア！ ポケモンバトルよ！」

イブキとポケモンバトルした日の放課後。自宅に帰ると何故か俺の自宅の前で腕を

組んで仁王立ちしているイブキがいた。学校指定のブレザーではなく、ジムリーダーの時のようにマントをしていけば、かなり様になっていいるだろうなと場違いなことを考えて遠い目をした。

「……早くない?」

「……? アンタが挑んでいいって言ったんじゃない?」

小首を傾げながらそう呟くイブキ。元が美少女ということもあり、大変様になってい

いや、確かにポケモンバトルは何度でも来いって言ったのは俺なんだが、まさか放課後に自宅で挑まれるとは思っても見なかった。

ん? というかなんでコイツ俺の自宅の場所を知ってるんだ?

「ワタルさんが教えてくれたわ」

フスベシティに越して来るに当たって、長老やワタルに話を通していたと家族に言われたことを思い出した。どうやらそれ経由で、イブキは俺がアローラで弾けていたことを知り、実力者ならばとポケモンバトルを挑んだのではないかという仮説を思い付く。

よし、フスベシティのジムとやらに殴り込みに行つてやろうか、個人情報をなんだと思つているんだ——と、思ったが、そもそもポケモンの主人公は他人の民家に普通に入りまくっていたことを思い出す。

外で待っていただけいい娘なのだろうか……？

『よかったですねマスター。早速、新しいお友達が出来ましたよ』

「かぶりん」

うるさいお前ら。というかジャラランガを見習って早くボールに入れ。

『じゃあ、私とフェローチェさんは家事があるのでジャラランガさんたちとやっていてください』

「かぶりん」

テレパシーでそう言いながらサナエさんはフェローチェを引き連れつつ、”ねんりき<sup>マスターキー</sup>”で鍵を開けて家に入って行った。

ちなみに家の掃除をしているのは主にフェローチェだ。エプロンを着けて、はたきやコロコロで家中を掃除するのが趣味なのである。

あつ、クソ。アイツらが抜けたから俺の手持ちがジャラランガ<sup>ド</sup>・ドラミドロ<sup>ラ</sup>・コモルー<sup>ゴ</sup>になったじゃないか。バトルガールのアイデンティティーが……。

ちなみにジャラランガはジャラコの頃にポニ島で捕まえたポケモン。ドラミドロはクズモーのタマゴを母方の祖母から貰ったポケモン。コモルーは父方の祖父から孫娘を守ってくれるようにと預けられたポケモンである。

「さあ、行くわよ！」

イブキはそう言ってモンスターボールを掲げてきた。その様子はとても楽しげであり、その表情を見ているだけでなんとなく無下にするのは、はばか憚られた。

「仕方ないな……」

そう言いながら今度はドラミドロとコモルーも出してやろうと考えるのであった。

新しく始まったこの生活を俺はなんだかんだ楽しみ始めているのかも知れない。

## バトルガールとトレーナーズスクール

(汚い場所ね……)

ほんの少し前まで輝かんばかりに白い砂漠と、きらびやかな宝石だけがどこまでも存在する場所にいたポケモンが思った最初の感想はそれだった。

地面は過度に濡れており、過剰で鬱蒼とした植物の緑が目にも毒で、辺りを這い回る生き物は不細工な彩りをし、あまつさえ大気まで湿っぽい。

どこを見ても不潔で汚く不衛生。触れることどころか、この大地を踏み締めることさえ不快にそのポケモンは思っていた。

唯一見れるものは、同じ色をした青空ぐらいのものだろう。そのポケモンは天を仰ぎ、深く溜め息を吐いた。その様子は女性とある虫を合わせたような容姿により、暗黒に落とされたダイヤモンドのように酷く輝いて見えた。

故にだろう——。

『先手必勝！ テレポートドロップキック！——あれっ!?!』



この世界を不浄と切つて捨て、全てに気を許さなかった彼女は、真後ろから突如出現した女性のようなポケモンによる奇つ怪な攻撃を事も無げに躲した。

その女性のようなポケモンは、これまで見たこの世界の存在にしては見える方ではあつたが、頭の方が足りない、彼女は嘲笑を上げる。

その様子にテレポートをしてまで蹴りを入れようとしてきたポケモンは、猫が背中の毛を立てて威嚇するように敵意を剥き出しにしていた。

『なんだコイツやっぱり見た目通りの中身じゃねーですか!? ぶつ殺してや——いったい!?!』

「おい、待てや。そのアホサーナイト」

がしりと音を立て、そのポケモン——サーナイトの首が背後から掴まれる。

『おう!! ギブギブ絞まる絞まる!?!』

「首が絞まろうと会話テレバシに支障はねえな。ウルトラビーストを見掛けた瞬間、避難命令を無視して突っ込んでいったポケモン——いやバカモン」

『あんだだけデタラメな身体能力してるクセに何チキってるんですか?! マスターのぼかぢからとノーてんきと空気の読め無さをここで使わずしていつ使うのです?!』

「お前が俺のことをどう思ってるかよくわかった」

サーナイトと言いつ争っているのは、サーナイトよりも小柄な少女だった。身長的に手を伸ばすと、丁度サーナイトの首に届くぐらいである。

『気に入らねえんですよ!? その如何にも育ちが良さそうな面構えが気に入らねえ!』

「私怨じゃねえか」

『私怨も私怨ですよ!? なんだったいいい! 育ちの良い奴の鼻を明かして、足蹴にするチャンスだ!』

「お前、本当にポケモン生の性格厳選失敗してるな」

『性格いじつぱりで頭のとくこうが低い人に言われたくないですよー! どうせマスタ―はマツシブーンの親戚か何かでしょう!』

「はははは、表に出ろ。カプ・テテフの完全下位め」

『い……言つてはならねえことを言いやがったなああ!? 寄越せ! メガストーンを寄越してください! メガバングルを下さい! そしたら今すぐあの疫病神に特攻してやるう! XYではあんなに持て囃しといて、サンムーンでテテフが出た瞬間にゴミみたいにやり捨てしやがってよお!? お前らぜってえ許さねえからなあ!』

「お前はいつたい何と戦っているんだ……」

「ジャラ……」

そんな二人の隣にいるポケモン——ジャラランガは「またか……」と言わんばかり

の困り顔をしている。

(——え、なにコイツら……)

彼女は綺麗や汚いの概念の外にある何かよく分からないものに困惑していた。

しかし、それと同時に自身が無視されていることにフツフツと苛立ちが募り、彼女は自身から行動に出た。

「かぶりん」

いい加減にしろという意思を込めて、口喧嘩を続けている二人に彼女は一瞬で迫り、足を振り上げる。

同じ種族の中でも、最速の己を止めれる者などいるはずもない。彼女はそう自負しており、実際に彼女の速度は、常人からすれば瞬間移動のようにさえ錯覚しただろう。

「あ、あ、ん?」

『引っ込んでなさい白ゴ○ブリ!』

「がふッ!？」

それはあまりに完璧な連携だった。

まず、とんでもない速度で反応した少女が、片腕を盾にして彼女の蹴りを受け止める。そして、カウンターに近い要領で苛烈な震脚を行い、自身を中心として周囲の地面に衝撃を与えた。

地に立つ彼女はその衝撃によりよろめき、その僅かな隙にサーナイトが”サイコキネシス”を放った。あまりに息の合ったタイミングのそれは彼女に直撃する。

タイプ一致かつ弱点。その上、特攻種族値125の威力を受け止められるだけの特防が、スピードとパワーに全てを懸けたようなポケモンである彼女にあるわけもない。

(きれいだわ……)

その刹那の時間に彼女は魅力された。ポケモンとトレーナー、本当の意味で隣に並び立つ光景は正しくパートナーを思わせ、その輝きに彼女は当てられたのである。

彼女は目を回して地面に倒れ込む。完全に戦闘不能であった。

『……………あれ? やりましたよマスター! なんか倒しましたよ! 捕獲しま

しよう捕獲！ ポケモンゲットだぜ！』

「お前本当に調子いい奴だなあ……」

「ジャラ……」

これがウルトラビースト——フェローチェとドラキアたちとの奇遇の話である。

尚、幾ら様々なボールを投げても捕まらなかつたため、いつそのこと目覚めたフェローチェに直接どうしたら捕まってくれるか聞いた結果、ドラキアがアローラ中のチビツ子からボールのお姉ちゃんと呼ばれる程、10個刻みでモンスターボールを買うハメになるのだが、それはまた別のお話である。



イブキを撃退してから少し経った頃。ようやくトレーナーズスクールにも馴染んできたという気がする。

『アローラであれだけ好き勝手やってた奴が今さらなんですよねえ……』

ポケモンの特権をフル活用し、俺の隣で何処かから持ってきたパイプ椅子に座りながらそんなテレパシーを呟くサナエさん。授業中なので、俺以外に伝わらないように話しているのが幸いである。

よくよく考えれば、イブキが家に来たとき、勢いのままにフスベシテイのジム破りをしていたらアローラの二の舞になったかもしれないので、踏み止まった俺はグツジョブと言えるだろう。

『ドラゴン単体も、みずタイプ込みのドラゴンもフェアリーの的ですので……』

その図が容易に想像出来るから嫌なんだよ……ポケモンの反応を見るからにもフェアリータイプなど浸透している気がしない。なので幾らワタルさんと言えども事前知識無しにフェアリータイプを刺されたら全タテされかねない。そうしたら最悪の場合、ワタルさんをポケモン1体で全タテした女というところでもない存在になっってしまうじゃないか。

『武勇伝が増えるだけです。まあ、それよりもこの学校——』

サナエさんは溜め息のようなテレパシーを出してから更に呟く。

『つまらないですねえ……』

サナエさんが言うことも一理あった。何せ、中等部と言えどもトレーナーズスクールで今やっていることは、正直なところ復習にすらならないような初歩的なことだ。タイプ相性がどうか、状態異常がどうか、俺やサナエさんにとっては考えなくても身に付いているような基礎的なものだ。まあ、子供の頃を思い出すと、そのような事もよくわからずにポケモンをしていた記憶があるので妥当な教育だろう。

しかし、教育とはそのようなもの。例えるならば必ず全員で一步步かされ、一步も歩けない子の事や、百歩歩ける子の事は考えないのが、今の教育と言うものだ。こうして、型にハマったトレーナーが量産されるのであろう。

前世の教育の闇を見ている気分だが、まあクラス内の当人は楽しくやっているし、百歩歩けるのも俺一人なので微笑ましいものだ。なにより、ポケモンは前世の教育と違って楽しい上にパートナー足り得る。故に苦ではない。それだけで幸いだ。

しかし、サナエさんは俺のそんな心を覗いても口をへの字に曲げているようである。『もつとこう、ポケモンにとつても為になるようなことを教わるモノだと思っ  
ていまし。ターン終了後の順番の法則とか』

「無茶言うなや……」

「……………？ どうしたのドラキア？」

「あ、いやなんでもない」

サナエさんのあんまりな発言に思わず呟いてしまい隣の席のイブキが反応してしまつた。悪いことをしたな。

ターン終了後の順番の法則なんて、レートでは必須級の知識のひとつだが、それ以外では知らないでも全く問題のないようなことである。

軽く説明すると――。

①天候ダメージ、すなわらし、あられ

②みらいよち、はめつのねがい



- ③ ねがいごと
- ④ たべのこし、だつぴ、うるおいボディなど
- ⑤ アクアリング
- ⑥ ねをはる
- ⑦ やどりぎのたね
- ⑧ どく、もうどく
- ⑨ やけど
- ⑩ あくむ
- ⑪ どくどくだま、かえんだま
- ⑫ くつつきバリ
- ⑬ のろい
- ⑭ しめつける、まきつく、ほのおのうずなど

そのような順番で処理がなされ、この14項目を覚えておけば特に問題はない。本当はこれだけではなくもつとあるが、それ以上は壁の切れるタイミングなどの微妙な誤差レベルなので覚えておいて損はないのはこの辺りまでだ。

ちなみに同じ番号の処理は素早さが高い方が先に発動する。例えば天候を変更する

ポケモンを出した場合、まず素早さの高い方の天候が優先され、その後遅い方が発動する。結果的に遅い方の天候が反映されるというわけである。そのため、レートでは砂パや雨パなどで最鈍調整が行われるのだ。ここ、テストに出るからな。

『ポケモン学会で発表すれば学会を震撼させれますよね』

先にポケモン虐待で捕まるのが落ちだろう。仮にこの法則を証明出来たのならどれほどの母数のポケモンたちを使って実験したというのか。そんなのゴメンである。

『……え？ ポケモン虐待？ えっ？』

何か言いたいことがあるればハッキリと言うように。修行や鍛練は決してポケモン虐待ではないのである。

『まあ、それは置いておき、私からするとこの教室は、ヤングースとツツケラの群れの中にマッシブーンが1匹混じっているような気分なんですけど？』

ははは、そのマッシブーンって言うのはあれだな？ サナエさんのことだよな？ 断じてサナエさんのトレーナーのことではあるまいな？

『あつ！ マスターそろそろお昼ですよお昼！ 私、購買部で焼きそばパン買ってきますね！ 自分の食べる！』

そう言つてサナエさんはパイプ椅子ごとレポートで逃げた。サナエさんにしては珍しいレポートの正しい使い方である。

「あれ？ サナエさんは？」

「パン買いに行った」

しかし、問い掛けにおいて無言と無回答は肯定と知れ。後でシメる。

## むし／かくとうの日常

昼食を食べ終えて今は午後の授業。このトレーナーズスクールでは、午前は座学、午後は屋外でポケモンバトルの実戦と実にわかりやすいカリキュラムが組まれている。机の上で学んでもポケモンは強くはならないというわけだ。

しかし、ひとつだけもの申したいことがある。

この午後の授業は基本的に二人一組で行われるのである——二人一組で行われるのである。

ハツキリ言つて初日にイブキをフルボッコにしたも同然な俺はクラス内で若干……いやかなり一目を置かれ過ぎているため、向こう側から組もうと声を掛けられるわけがないのである。

『はい、二人組作つてー!』

ヤメロオ! サナエさん! ヤメロオ!

『……だったら自分から声を掛ければいいじゃないですか?』

それが出来たらフスベシティまで来ているわけがない。友達が沢山いるからアローラ地方を離れたくないとか普通思えるハズでしょうが!？」

『……マスターってなんで変なところで奥手なんですか。実際、友達全然いませんし——』

「……………お前はデコピンで”いわくだけ”ができ、片手で”かいりき”が使える同年代の女子と好きで友達になりたいと思うか？」

ちなみにアローラで言えば、”いわくだけ”はケンタロスに当たり、”かいりき”はカイリキーに当たるため、アローラ地方と秘伝マシンで比べた場合、どちらがより深刻かは言うまでもない。

『……………私のスカートみたいなヒラヒラで涙拭きます?』

ありがたいがいらぬ。サナエさんのスカートみたいなヒラヒラ無茶苦茶水弾くもん……………。

そんなわけで——。

「ドラキア! ポケモンバトルよ!」

「いい加減飽きないの……………」

基本的にドラゴンの里の長老の孫補正で、俺と同じくペアのいないイブキと必然的にペアになるのである。

そして、毎回の如く俺に嬉々としてポケモンバトルを挑んでくる。負け続けて、俺を見るだけで死んだ目をし始めているミニリュウ・ハクリュー・シードラの手持ちのことはお構い無しだ。

そんなんだからあの簡単な二択を全問正解すれば、”しんそく”持ちミニリュウが手に入る試練を何時まで経ってもクリア出来ないだと内心思わなくもないが、事実上フスベシティで俺に友達と呼べる存在は、イブキしかいないので口が裂けても言えない。

『貴女たちはどうして、そう全く違う致命的な欠点を互いに補完し合うような謎の関係なんですか……』

「ズツ友達もん」

「とつ、友達……うん、そうよね！ 当たり前じゃない！」

いかん……あまりに人を疑わないイブキに下らないことを言ったことをちよつぱり後悔した。

しかし、ポケモンバトルはポケモンバトルである。

「はあ……行け”ドラミドロ”」

「□□□□——！」

俺がモンスターボールを投げると、声にならない叫びを上げて、中からドラミドロが現れた。しかし、通常の個体よりも一回りと少し大きい。コレがばあちゃんから貰ったタマゴから孵った俺のドラミドロだ。

まあ、本当は、ばあちゃんのエースポケモン<sup>オ</sup>のタマゴを貰おうとしたのだが、なんでもこのクズモ어의タマゴ……とつてもチャーミングなのね!”と、タマゴの段階からばあちゃんがとても推してきたのでそちらを貰ったのだ。

すると素早さを除く5Vで、夢特性のてきおうりよく持ち。更に凶鑑では、高さ／おもさが1.8m / 81.5kgのところ、3.3m / 201.5kgまで育ったのである。ばあちゃんすげえ。

『いや、後者は”オニシズクモがぬしポケモンになれるなら、ドラミドロだつてぬしポケモンになれるだろ”つて言つて、ポニ島のポニの荒潮に生まれたてのクズモ어를放流して育てたせいじゃ——』

「しゃらっつぷ」

「□□□……」

サナエさんは一言も二言も多いのである。ん？　なんだドラミドロ？　そのあの頃は本当に大変だったとしても言いたげな遠い目は？　強くなつたんだからいいじゃないか。

ちなみにてきおうりよくはタイプ一致技が、1. 5倍から2. 0倍になる中々の強特性だ。そして、どく／ドラゴンタイプであるドラミドロが誇る最強のドラゴンわざは――

「ドラミドロ。”りゆうせいぐん”」

「□□□□□□――！」

「ミ、ミニリユウ!?」

「リユウ……」

全てを受け入れたかのように晴れやかな表情で満天の”実質威力<sup>2.60</sup>りゆうせいぐん”を見上げるミニリユウはすぐに真昼の星になった。

ちなみに、日頃からこういう容赦が無さ過ぎることをイブキにしていたので、クラスメイトらが俺とペアを組もうとしなかったということを知ったのは、数年後の同窓会で



の話である。



「……………りん」

フェローチエの朝は早い。寝ぼけ眼を擦りながら目を醒まし、窓の外を見ればまだ日が登ったばかりであった。

そして、すぐに3枚引いてあるうち、自分が寝ていた左側の布団を片付けつつ横目で

隣の2枚の布団を眺める。

「うーん……」

『Z z z——』

そこでは中央の布団で眠るドラキアを、サーナイトが抱きしめて眠っていた。しかし、抱きしめた状態なのだが、サーナイトの胸に生える赤い角のような物体がドラキアの顔に当たっており、ドラキアは悪夢に魘うなされているように見えた。対照的にサーナイトは、気持ち良さげにぐっすり眠っている。右側の布団はほとんど意味を成していない。

『んげっ!?!』

とりあえずフェローチエは、サーナイトが起きない程度に足で頭を小突いてからリビングへと向かった。



「……………(すっ)」

まず、フェローチエの朝は、玄関とりビングに備え付けられた自動手指消毒器にアルコール消毒液を補充する事から始まる。

《外から帰ったら必ず消毒!》

と、自動手指消毒器の上にある張り紙に、マジックでやたら可愛らしい丸文字で書かれており、これを書いた者の衛生管理の徹底ぶりがわかるだろう。

「……………」

するとフェローチエは自動手指消毒器内のアルコール消毒液の減り具合から見て、ちゃんと消毒していない者がいることに気付く。

ドラキアは、ポケモンを除けば一人暮らしており、その上1名を除いてちゃんと消毒をしてきていることをフェローチエは思い出す。

すぐにフェローチエはリビングからマジックを持って来ると、キャップを開けてマジックの頭を張り紙につけた。

「……………(きゅつきゅつきゅつ)」

すぐに可愛らしい丸文字で張り紙に文章が書き加わり、書き出したフェローチエは「どうだ!」と言わんばかりの顔をした。

《外から帰ったら必ず消毒! 緑は後で蹴る!》

無論、ドラキアの手持ちに緑を基調とした配色を持つポケモンは1匹のみである。日頃の行いは大事だと言えよう。



「〜♪」

アルコール消毒液の補充後、ドラキアとサーナイトが起きるまでの間。フェローチエはエプロン姿で平屋の一戸建であるこの家の掃除をしていた。手には布はたきとクイックワイパーが握られており、フローリングの床と棚の上を丁寧に掃除する。また、ソファーや布製品はコロコロで掃除していた。

その徹底ぶりは目を見張るものがあるが、外から帰った時の手指消毒以外は趣味の範疇であるため、特に他者に強要はしていない。フェローチエの趣味が掃除と消毒なのである。

一通り掃除を終えてからキッチンに向かって軽めの朝食を作り、フェローチエは自身のトレーナーが起床するのを待った。

「おはようフェローチエ」

「かぶりん」

フェローチエは先に来たドラキアに笑顔で挨拶をする。その様子にはかつて、この世界の全てを不浄と捨てきった面影はどこにもなく、ウルトラビーストとは思えない明らかな友好を示していた。

『おはよう(ぎ)いマツ?!?!?』

「――!」

そして、次に来た汚物サナイトの尻に突き刺さるように放たれたフェローチェのそれは、実に見事な回し蹴りであった。この理不尽具合は、満場一致でウルトラビーストと言えよう。



『け、ケツが……ケツが割れる……』

「じゃあ、学校行ってくるぞフェローチェ」

「かぶりん」

ドラキアはそう言いつつ、急所に当たって戦闘不能になった無駄にモデル体型のサーナイト(高さ/重さ:170cm/54.9kg)を軽々片方の肩に担ぎながらトレーナーズスクールより先にポケセンセンターの方に足を進めた。そんなドラキアをフェローチェは、腰に片手を当てつつ、反対の手を小さく振って見送る。

今日、フェローチエは食材の買い物に行くため、学校にはついて行かずにお留守番なのである。

「……………」

時間を確認してから、ホワイトボードとホワイトボード用マジックを入れたエコバッグ片手に家を出るフェローチエ。エプロンは着けたままであり、遠目から見ればかなり背の高い人に見えなくもない。

そして、辿り着いたのはフスベシテイの商店街――。

「おっ、フェローチエさん今日も綺麗だね！」

「かぶりん」

「フェローチエさん今日はいいいのが入ってるよ！」

「かぶりん」

「あつ、フェローチエ姉ちゃんだあ！ 遊んで！遊んで！」

「……………」（きゅぽっ、きゅつきゅつきゅっ）

《買い物のあとでね》

「えー……約束だよ！」

《はいはい》

意外にもフェローチエはフスベシティの商店街で名物になっていた。まあ、見てくれよし、素行よし、筆談まで出来るポケモンのため、当然とも言えるだろう。

ちなみにだが、アローラの頃から同じようなことになっており、住民にとってはドラキアよりもフェローチエが居なくなること惜しまれていたりする。

「ど、泥棒だ!？」

「かぶりん……?？」

すると何やら胸に大きな赤いRのマークがある黒いユニフォームのようなものを着た男が、フレンドリイシヨップから走り去って行く姿がフェローチエの目に入る。

「……………」

それを見たフェローチエの目は、こちらの世界に来たばかりの当時のように冷たく嘲笑う色を取り戻していた。



フスベシティの近くにあり、岩に囲まれた中にある小さな廃屋。そこで胸に赤いRのマークがついた黒服を着た十数人の男女がいた。

”ロケット団”を少しでも知るものならば、彼らがどんな組織に所属しているのか一目瞭然だろう。

彼らの目的は、フスベシティの”りゅうのあな”にいるミニリュウの密猟である。レアなポケモンであるミニリュウをロケットゲームコーナーの景品として密猟して仕入れ、資金源をより確固足るものにしようという算段である。



「ん？ アイツはどうした？」

「景気づけにフレンドリイシヨップでなんかかつぱらうってさ」

「おいおい、仕事の前に足がつくようなことするなよ」

そうは言うが、彼らは笑っていた。それほどまでに彼らにとつては軽い行動なのだろう。

「おーい、お前らー！」

「おう、遅かったじゃ——」

ロケット団員たちは廃屋の出入り口から聞こえる見知った声に釣られ、次々にそちらへ向くと、次の瞬間には言葉を失ってただソレを見つめていた。

「かぶりん」

熱に犯されたように息を荒くしているロケット団員の男の隣に立つソレは、虫と女性を合わせたような純白のポケモンであった。

ポケモンは己の全てを見せつけるようにそれを“振り撒き”ながらただ歩く。たったそれだけでロケット団員は次々と無力化されて行き、遂に手持ちのポケモンを一匹足りとも出すこともなく、皆一様にうわごとを呟きながら、フェローチエを熱を持った瞳

で眺めるばかりだった。

彼女はUBO2 BEAUTY<sup>ビューティ</sup>。半人半虫の容姿を持ち、どんな生物も魅了するフェロモンで相手を虜にする能力を持ったウルトラビーストである。

## みず／ドラゴンの種族値の暴力

『プリムオン……プリムオン……私と同じ可愛い女性路線のフェアリー……ガラル地方には虎の子のメガシンカはない……プリムオンには固有グラのキョダイマックスがある……』

朝起きると何故かサナエさんがリビングでゾンビのようにふらふらしていた。

『素早さと、申し訳程度の体力と総合値以外は私の種族値を全て超えている……』

まあ、まれによくあることなのでサナエさんを放置して、コーヒーメーカーの前まで行き、朝の一杯を淹れることにする。

『鈍足型で防御種族値も95はあるので、物理を受けれなくもないトリパ要員……その上、夢特性で”マジックミラー”ですって……？ インチキ効果もいい加減にしてください……！』

ちなみになぜサナエさんがこうなっているかと言うと、サナエさんの”みらいよち”

はかなり先の未来や平行世界まで見通せるとかなんとかで、たまに見通しているのだ

が、見る必要のないところまで見てしまつてこうなることもあるのである。

そもそも俺のポケモンになつた理由も”みらいよち”で見て、一番面白そうだったからとかなんとか。まあ、攻略本を見ながら人生を生きるような感覚になるらしく、更にとんでもない未来を見通してしまう可能性もあるので、滅多に使わないようにしているそうだが、今回はその滅多でファンブルを引いたらしい。

むう……この体のせいかな、やつぱりコーヒーがスゴくにがい……。砂糖とミルクを入れなきゃ飲めたものじゃないな。

『いえ、それらを加味しなくとも攻撃種族値が90もあるじゃないですか……。か、仮に完全版で最早、私の唯一の利点である先制技の”かげうち”とか覚えられるようになったら……。また、私のほぼ完全上位交換じゃないですか……。!? というか、耐久しやすい分、旅パでは”めいそう”積んで、”ドレインキッス”で六タテするのはあちらの方が、夢特性持ちでなくとも遥かに事故らない!? 折角、テテフの居ない地方なのに!』

一応、サナエさんの分のコーヒーも淹れていると、覚えられないのにサナエさんがじだんだを踏み始める。いや、これはただの地団駄だな。

そして、凄まじい勢いと剣幕で俺に迫ると、真剣に濁つた瞳で言い放つた。

『おのれゲーフリ……。おのれ任天堂……。!? マスター! 今すぐに新天地へ行きましょう! 全ての”ミブリム”をガラル地方から殲滅するのです……。!! さあ! さ

あ!？」

「ふんっ……!」

『ふぐう!』

とりあえず、サナエさんが正気に戻るように首筋へ全力の回し蹴りを叩き込んでおいた。かくとう技はエスパール／フェアリーのサナエさんにダメージ4分の1なのでこれぐらいで丁度いい。

地面に転がされながらもサナエさんは最後の力を振り絞って頭を上げた。

『あ、アイドルポケモンの柔肌になってことするんですか可愛いマッシュフーンマスター!』

ルビと文字が逆だが、そもそも頭に直接響くんだから、両方ともこっちはわかっているだよなあ……。

『あつ、もうひとつ見えました。ムゲンダイナってバトルタワーでも使えるんですね……! レイドにもタワーにも引つ張り風のムゲンダイナはパケ伝よりもよっぽどプレイヤーにとつて英雄じゃないですか……! ガクッ……』

最後にそれだけ告げて、サナエさんは動かなくなつた。

本当になんなんだコイツ……一体何の世界が見えているんだ？



ここ数日。ワタルはジムリーダーとしての仕事を全うしつつイブキからドラキアの話聞いていた。というよりもイブキからやたら楽しげにトレーナーズスクールでの話を聞かされる中に必然的にドラキアの話が出るだけでも言える。

それによるとドラキアは、6体の手持ちポケモンを持っているらしいが、その中でトレーナーズスクールに連れてくるのは5体のみ。

まずはサーナイト。テレパシーで会話が出るポケモンであり、バトルではテレポー

トから繰り出される多彩な体術と3色パンチを主体に戦うエスパーポケモンとのこと。どうもあの綺麗で華奢な容姿からあのような近接戦闘主体の戦い方は想像しにくいので、本当は特殊技が主体なのではないかとイブキは考えている。

2番目にフェローチエ。むし／かくとうタイプのポケモンであり、異様な脚力と素早さ・攻撃・特攻が極めて高く、ジョウト地方のポケモンをかなり逸脱したバトルスタイルが特徴とのこと。フェローチエに関しては最早、トレーナーが目で追えないレベルであるが、ドラキアはどうみてもフェローチエを目で追えているようだ。

3番目にジャラランガ。鱗に覆われ、格闘家といった出で立ちの二足歩行のトカゲのようなポケモンであり、かくとう／ドラゴンの複合タイプという話だけで想像の膨らむポケモンであった。純粋な格闘能力においては、ドラキアの手持ちポケモンで、頭ひとつ以上抜けており、拳の一撃は衝撃波のみで周囲を破壊し、特にアツパーカットは衝撃波で地形を変えてしまう程の出鱈目な威力があるという。

4番目にドラミドロ。どく／ドラゴンタイプのポケモンであり、リーフイーシードラゴンをそのままドラゴンポケモンにしたような姿すがた形をし、“りゆうせいぐん”なるドラゴンタイプの技を開幕で毎回使用してくるそうだ。それとドラキアの手持ちポケモンの中で最も素早さが低く、その場での回避からのカウンター攻撃以外は固定砲台のよくな役回りをしている。

5番目はコモルー。鋼の殻を纏った四本足のタマゴのような不格好な外見であり、実力も他のポケモン達に比べれば華がなく、一番イブキのポケモンとマトモな戦いになるらしい。見た目の通り、素早さはあまりないが、やたら硬く、気がつくとりゆうのまゝ”を積まれ、”ドラゴンクロー”で全抜き<sup>三</sup>されるらしい。また、”しんかのきせき”という名のよくわからない持ち物を持たせているようだ。

そして、ドラキアの最大の特徴としてはあまり自身のポケモンに技の指示などの正確な命令を出さないことだ。ポケモン自体に覚えさせているのか、経験故か、ポケモンが自分自身で行動する場面がとて多いのである。特にサーナイトとフェローチエに関しては技の指示を下したことを見たことがないとのこと。

また、指示を無視するポケモンは星の数ほどいるが、戦況を理解した上で、あえてトレーナーからの指示を仰がないという、利口かつ戦闘経験を積み過ぎた百戦錬磨のポケモンたちとはイブキの評価である。

イブキは日頃からドラキアにポケモンバトルを挑んでは、車に撥ね飛ばされる事故に遭うように負けてはいるが、未来のフスベシテイのジムリーダーになれるだけの素質は十分にあるということもあり、観察眼は確かなものなのだ。ポケモンと自他含めて人の心に疎いことだけが致命的な問題点と言えよう。

トレーナーが戦ってもいないトレーナーの手持ちポケモンとトレーナーの情報を知



るのはどうかと考えようによっては思いかも知れないが、イブキが勝手に言っているだけな上、ジムリーダーの手持ちポケモンなど常に公開されているため、条件はあまり変わらない。それにその程度で実力が左右されるほど、ドラキアとそのポケモンたちが弱いわけもない。

そして、そんな話を聞かされ続けていたワタルは自然にこう思うだろう。

「戦いたい……」

「リュ、リュ……」

フスベシティの隅にあり、人気の少ない公園のベンチで呟く彼はトレーナーとして限界であった。海千山千であり、戦闘になれば阿修羅の如くにも関わらず、今は隣でオロオロしているワタルのカイリュウが妙に印象的である。

しかし、ワタルはイブキよりもあらゆる意味で遥かに大人であった。

アローラ地方で名うてのトレーナーが、わざわざ祖父の故郷を頼つてまで引つ込んできたということは、何かそれなりの事情があったのだろうというのが、ワタルの憶測である。

そのため、猪突猛進なイブキにわざわざ教え、けしかけるような真似をしたのは、歳

が近く同性のイブキが気に掛ければ、幾らか彼女の助けになってやれるのではないかという大人過ぎる対応であった。

しかし、学校での毎日が非常に楽しそうな様子のイブキから聞けば聞くほど、ドラキアの異次元のドラゴン使いっぷりが露呈するのである。かくとうタイプ？ 刺身のタンプポなようなものである。どう聞いてもドラキアの主軸はドラゴンタイプである。そうしてポケモントレーナーとしての矜持と闘争心を持って余し、悶々としつつワタルは大きな溜め息を吐いた。

丁度、その時である――。

『YOU やっちゃいなYOー！』

「かぶりん……」

ワタルの頭に直接、奇っ怪なテレパシーが響き渡り、それを嗜めるようで諦めたような声色のポケモンの呟きも聞こえた。

「君たちは……！」

そこにいたのは、緑と白の配色の女性的なポケモン――サーナイトと、純白の女性的なポケモン――フェローチエの2体であった。

フェローチエは非常に社交的でフスベシティでちよつとした有名ポケモンなため、ワタルとも面識があつたのである。ワタルとしては筆談ができ、礼儀正しく、明らかに通常のポケモンとは一線を画す強者のオーラとでも言うべき何かを感じさせるポケモンという印象がある。

そして、サーナイトはテレパシーで人間と直接会話が出来るポケモンであり、話し掛けてくるため、普通の人間とほとんど変わらない認識をされているポケモンだ。

そんな2体のポケモン——主にサーナイトがワタルの前に身を乗り出さんばかりにやってくるテレパシーを飛ばす。

『やりたいようにやっちゃまえばいいんですよ……！　大丈夫です！　マスターはアローラ地方では好き勝手に暴れるだけ暴れたクセに、素の陰キヤな人格が有名税に堪えられず、片親の田舎に引つ込んだだけのチキン雌野郎なんですから！』

「かぶりん……」

あまりにも口汚く自身の主人のことを語るサーナイトのテレパシーにワタルは目を丸くした。しかし、フェローチエの方も目は決して合わせ無いが、相槌を打つようにしているため、サーナイトの言い分に自分も少しは言いたいことがあるようである。

『それにマスターはまだ存在しませんので断定はしませんが、島巡りを最速で終えたということは、アローラ地方での四天王からチャンピオンにあたる実力があるのは明白！』

「これを戦わずして何がポケモントレーナーですか!」

「……かぶりん」

遂にサーナイトは遂に自分が最も言いたいことをテレパシーにする。

『……いつまでもイブキさんばかりにポケモンバトルを続けていたら、てもちポケモンのこつちの身が鈍ってしまいそうなのです……戦ってください!』

「かぶりん」

そして、それは割りと切実な願いであった。



「ドラキアちゃん。ポケモンバトルをしようじゃないか！」

現在、自宅の庭先でなぜかドラゴン使いのワタルさんが笑顔でそんなことを言っていた。その隣にはサナエさんとフェローチエがおり、笑顔のサナエさんはいつも通りとして、フェローチエは全く目を合わせようとしない。

とりあえず、サナエさんに近づくと片腕を取って捻り上げた。

『ああ!? 折れる!? 折れてしまう!? 伝統のアイドルポケモンの腕が折れてしまます!?!』

うるさい。そのためにポケモンセンターがあるんだ。

しかし、サナエさんも体格差を利用して、それなりに抵抗してくるため、サナエさんを押しつつもそれなりに拮抗する。

『う、うおおお!! マスター。最近したポケモンバトルを思い出してください!』

「えーと、とりあえず、イブキだな。それから……イブキだ。えーと……イブキだ……」  
『ええ、イブキさんオンリーです。そんなもって私たちにとつちや、サンドバッグ同然です!』

流石に何が言いたいのか、俺でも理解出来たため、サナエさんから手を離れた。というか、俺の手持ちが意外にも好戦的だったことに驚く。

『いったい誰のせいですが、だ・れ・の！ 兎に角、イブキさんばかり相手にしてても雀の涙ほどの経験値にもなりはしませんし、それ以上にここが現実である以上、ポケモンバトルの腕が鈍るんですよ！』

むう……それは確かにとっても悪いことをしたかも知れない……主にさつきからサナエさんを使つた負い目からか、俺と全く目を合わせてくれないフェローチェと、他ののもちポケモンに対して。

『そーだそーだ！……って私は!?』

そんなこんなでワタルさんとポケモンバトルをすることになった。

しかし、正直に言うとな俺のポケモンバトルは、この世界で行われているようなポケモンとトレーナー同士の読み合や渡り合いからは程遠く、鍛練とポケモンの才能による暴力の側面が強いので、俺の純粋なトレーナーとしての素質はそこまで高くないと思う。

『そんな奴なら今のところ最速で島巡りチャンピオンになれる訳がないんだよなあ……』

そして、サナエさんの呟きテレパシーは無視しつつ、3 VS 3の勝ち抜き戦というポピュラーな方式で決めることになった。

『ほう……なんだ。水色頭の童ばかりと遊んでいたゆえ、フスベシティには大したトレーナーはおらんと思っていたが……中々どうして悪くない面構えのトレーナーもいるではないか』

『……げっ』

すると、サナエさんと同じように“テレパシー”を飛ばされる。そして、リビングの扉を開け放たれると、そこから這い出るようにゆっくりとした動きで、俺の6体目のてもちポケモンが姿を現した。

立つと4mを超える高さで、“ドラゴン”タイプ特有の恐ろしくも美しい外観を目にしたためか、ワタルさんは酷く驚きつつも、その瞳には確かな熱と高揚が見られる。

『ちよ……!?! あなたが出てきたら後ろに回ってこないじゃないですか!?!』

「かぶりん!」

『黙れ……回復してもう一度すればいいであろう?』

それだけテレパシーで言って、ソイツはサナエさんとフェローチエを黙らせると、ワタルさんの方へと目を向ける。

『では始めようか……?』

ワタルさんは、先鋒のギャラドスを1体出し、冷や汗を額に浮かべつつも6体目のポケモンへと対峙した。

ギャラドスも怖い顔で勇ましく対峙しているが、その中に戦々恐々といった様子も見え隠れしているように見える。

そして、ポケモンバトルの火蓋が切って落とされる――。

「ギャラドス！ ”ハイドロポンプ”だ！」

先に動いたのはワタルさんであった。

ギャラドスから光線のような凄まじい水流が放たれる。それは並のみずポケモンならば、一撃で簡単に削り切れてしまうほど鍛え抜かれた威力を秘めていた。

そして、ハイドロポンプはソイツに確かに着弾し――。

「なんだと……!?!」

『うーん……? その程度の威力では避けるまでも無いなあ?』

『しかも4分の一ですからね』

「かぶりん」

観戦し始めているサナエさんとフェローチエはそう言うが、初見でタイプを見抜くことが特に難しいポケモンの一体だと俺は思うぞ……。

「――!?!」

ハイドロポンプを真つ正面から体で受け止めながら、異様な速度でギャラドスの目の



前まで接近したソイツは、ギャラドスの首を鉤爪のような指をした手で掴むと、片腕に引き寄せてチョークスリーパーを掛ける。

こうげきの種族値が5だけギャラドスの方が上とはいえ、流石に腕が存在しないギャラドスにこれは最早、避けようがない。その上、ギャラドスの長い体を自身の全身で踏みつけるように押さえ込み、無理やり海老ぞりにしているため、チョークスリーパーのままでも後、数十秒も掛からずにギャラドスは落とされるであろう。

しかし、その体勢のまま、ソイツは更に技を繰り出した。

『この距離なら外しようもないなあ……？ 避けたければ避けてみよう？ ”かみなり

”』

「――」

「ギャラドスう!？」

ソイツの全身から極大の雷撃が放たれ、絞め落とされ掛けているため、ゼロ距離のギャラドスへと瞬時に直撃した。当然、タイプ不一致とはいえ、とくこの種族値150という怪物から繰り出される4倍弱点の”かみなり”に、ワタルさんのてもちとはいえギャラドスが耐えられる訳もない。

焦げ焦げになったギャラドスは目を白目を剥いて倒れ、ピクピクと痙攣するばかりで動かなくなった。

「すまないギャラドス……」

そう言いながらモンスターボールにギャラドスを回収するワタルさんを見つつ、次のポケモンの想いを馳せた様子のソイツは、ワタルさんを見下ろしながらテレパシーを投げ掛ける。

『全く足りんなあ……？ 残りの2体……同時に掛かって来てもよいぞ？』

そう言われ、ワタルさんはこれまでのポケモンとは、あまりにも一線を画す存在に対して、妥協も遠慮も無用と悟ったのか、プテラとカイリユーを同時に場に出した。

『うむ、それでよい。汝は相手の実力をよく見極めておるわ………では行くぞ？』

「ああ、行くぞ！ プテラ！ カイリユー！」

そして、ソイツに対して、ワタルさんが操るプテラとカイリユーが襲い掛かった。

『これが種族値の暴力ですか』

「かぶりん」

多分、また違う別のものではないかと思いつつ、ポケモンセンターに向かう準備をし始めようかと考えるのであった。



突然だが、ポケモンの世界で1匹<sup>はじめて</sup>目のポケモンとは何であろうか？

無論、ゲームの主人公ならば、Lv6のままポケモンセンターのパソコンに投げ込むか交換に出して、別のカセットからポケモンを引きずり出すことも可能というか、ゲーム機2個持ちで数周目だとほとんどそのようになると思われる。しかし、そもそもポケモンがいない状態では、ポケモンセンターまで行くことさえ不可能なので、1匹目は御三家のどれかになることだろう。

他にもゲーム内のキャラを例に出すと、ポケモン廃人化するミツルくんは、主人公の

下でなきごえしか覚えていないラルトスを捕獲して、中盤まで1匹わるあがきさせで戦わせていた。アニメではサトシは御三家が全て渡された後だったので貰えず、問題児のピカチュウを引き取っている。

そんな風に何かの理由や因果があつて1匹目のポケモンが決まることだろう。まあ、この1匹目のポケモンが何だったという話題は、トレーナーとトレーナーが話すときに、見合いで趣味を聞くぐらいは定石な問いのため、意外と話題になることも多いのである。

ちなみに色々なトレーナーから聞いた1匹目のポケモンを集計してみた結果、自宅の近くの草むらに居たとか、親のポケモンを貰ったというのがダントツに多かった。博士から御三家はあまり聞いた例ためしがない。まあ、博士と知り合いの確率やら御三家を持つトレーナーとの遭遇率を考えればそんなものだろう。主人公、ライバル、一部のトレーナーぐらいのものだもんな。

そんなわけで俺の1匹目のポケモンはと言えば、これは少々会話のネタにし難いものである。そのため、基本的にはサナエさんが草むらから飛び着いて来たと周りには伝えられている。しかし、これは実際とは異なる。正しくはサナエさんは2匹目のポケモンなのだ。

なので目の前にいる1匹目のポケモンとの遭遇についての話をしよう。



「〜♪」

忘れもしないアローラの夏。俺は自室でゼルダの伝説 ブレス オブ ザ ワイルドで遊んでいた。明確に任天堂製のゲーム機がある世界なので、当然ゼルダの伝説もあるのである。ポケモンでゼルダとか、スマブラのようだが、名作は色褪せない。

また、まだ体をポケモンと共に鍛えるという発想がなかった頃だった上、流石に年齢が低過ぎたため、前世と同じように家に籠り、ゲームで遊ぶことが染み付いた俺はそうやって過ごすことが多かった。

そして、2時間ほど続けてプレイして、少し疲れてきたと思ったところにそれはやって来た。

突如として部屋の中心の空間に巨大な亀裂が走ったのだ。そして、さながら空を割つ

て登場するウルトラマン A のバキシムエイズの如くバリバリと割れ目を広げて現れる。

アローラの家は平屋の一戸建てで、天井が高かったことも幸いだっただろう。何せそれは 4.2 m の体躯である。また、300 kg 以上の体重によって床が軋んだが、こちらは大した問題ではない。

俺は反射的にゲームをポーズしつつ、そのポケモンを眺めて目を丸くした。ポケモンの方は喜怒哀楽のわからない赤い瞳でこちらを眺めている。

そして、口を開いたのはポケモンの方であった。

『童よ。妙な空間に繋がったため出て来たのだが、ここはどここの地方だ?』

「あつ、はい、アローラ地方です……」

『アローラ……? ああ、そういうことか。位相そのものが違うと思えば、あれはウルトラホールか』

頭に直接響く女性に近い声。そして、ウルトラホールという単語を聞きながらも、俺は「夢特性のテレパシーかあ」と微妙にズレたことを考えていた気がする。

『まあいい……私はいつでも帰れる。ならば気にするようなことでもないな』

一人言を終えたポケモンは、大きくアクビをしてから黙る。そして、じつと俺のゼル伝プレイを見始めた。

「……………」

『……………』

無言の時間が俺にダイレクトに襲い掛かったが、こんなまだまだ序の口であった。

〜30分後〜

『……………(びくびく)』

『……………ほう』

〜60分後〜

『……………(るるる)』

『……………ほう』

〜90分後〜

『……………ぐふっ』

『……………ん？　どうかしたか童よ？』

帰れよお!？ 俺は声を大にして言いたかったが、そのポケモンは全く変わらぬ様子で何食わぬ顔で居座っていた。

そう言えば、コイツクラスともなれば数百、数千、数万年——下手すればそれ以上生きていく可能性があるため、”いつでも帰れる”というのはすぐ帰るという意味には直結しないことに今更気がつく。

『おい、そいつは弓で倒しやすい敵だろうか?』

「アツハイ」

そして、既にゲームの概要を理解したのか、ゲーム内の敵に対してそんな茶々まで入れてくる始末であった。

「……………やりますか?」

そして、気が動転したのか、場の空気に耐えられなかったのか、俺はコントローラーをソイツに渡してみたのである。

『……………いいのか?』

するとソイツはそれだけ言って普通にゲームをプレイし始め、最初とは逆の形になった。心なしか、ウキウキした様子でプレイしているようにさえ見える。

それから、ソイツはなんだかんだ。決して帰ろうとはせずに家……もつと言えば俺に居着いてしまう。そして、最初のもちポケモンに——まあ、てもちというか……すぐ



帰れると言ったまま、一向に帰る気配がなく、今の今まで居座り続けているポケモンと  
いうことが正しい。

ボールには倒れた場合にポケモンセンターに連れていくのに便利という理由をつけて捕獲したとき、一度入った切りで、2度と入った試しがないので、俺にとってサトシのピカチュウに当たるのかもしれない。

「俺はドラキアっていう名前です。あなたは？」

『んー？ 心を読む限り、君は知っているだろう？ まあ、それでも礼儀として名乗るなら——』

見たままでわかっているということを読み取られたことに驚いていると、ソレは愉しげに目の端をつり上げながらテレパシーを投げ掛ける。

『——』「パルキア」だ。そちは中々面白い中身の童よの……幾久しく頼むぞ？」

俺の1体目のポケモンにして、6体目のもちはウルトラホールを伝って現れた。どこか、別の次元や平行世界に存在する夢特性の“テレパシー”持ちのパルキアであった。よく考えれば自己紹介のときから居座る気だったのかもしれない。

ちなみに俺のパルキアに自然と格闘技を仕込んだせいで、ただでさえ強かった神様ク

ラスの伝説のポケモンが、誰も手がつけられないレベルまで強くなったのは、島巡りを始める少し前のお話である。

おばあちゃん……あなたが愛して止まない……シンオウ地方の神様とこんな形で奇遇しちやったよ……。